中学生 広島平和教育研修

8月5日から7日まで、富士見中学2年生5名（引率教諭1名）が町の代表として広島市を訪問しました。平和祈念式典への参列や平和記念資料館見学、「原爆被害者8・6証言のつどい」への参加など、戦争や平和について学びました。

参加者5名がこの研修を通して感じた平和への思いや決意を、今月から数回に分けて紹介します。

富士見中学校2年
小野（おの） 夏希（なつき）

世界の平和のために

私達が世界の平和を築くために必要なことは、悲しい歴史が語るメッセージに耳を傾け、それを未来に伝えていくことです。

一九四五年八月六日午前八時十五分、一発の原子爆弾で広島のすべてが一瞬にして奪い去られました。当時、佐々木禎子さんは二歳でした。禎子さんは原爆から奇跡的に助かり、元気に生活していましたが、十年後、原爆による放射能が原因で、突然白血病になりました。禎子さんは折り鶴を千羽折ると願いが叶うと友達から聞き、折り続けますが、十二歳で亡くなってしまいました。資料館には、禎子さんが薬の包み紙で折った小さな折り鶴が展示してありました。その頃は折り紙も十分になく、一つ一つ大切に作っていたのだと思いました。今回私は禎子さんの本を読んで広島研修の参加を決めました。原爆でたくさんの尊い命が奪われ、今も苦しんでいる人がいることを知りました。

資料館には、資料一つ一つが語るメッセージがありました。

証言のつどいでは、被爆された新原清人さんがお話をしてくださいました。

あの日、何ともいえない気持ちの悪い光と生暖かい爆風に襲われ、新原さんは気を失いました。一旦防空壕へ避難し、帰り道折原さんが見たのは、ボロボロの着物を着て、のそのそと歩く人、力尽きて道端にしゃがみ込む人・・・家の下敷きになり助けを求める人もいましたが、何もしてあげることができずに逃げてきました。

次の日、新原さんはおばさんと行方不明のいとこを探しに行きました。橋を通ると、川に向かって手を合わせている人がいます。川を覗くと、手をつないだまま死んでいる親子の死体がありました。川にはたくさんの死体が流れていて、潮の流れで行ったり来たりしていたそうです。

それからも、新原さんは原爆に苦しみました。原爆症が心配で毛を引っ張って抜けないか試してみたり、「新原は原爆を受けているから移る」と、差別を受けたこともあったそうです。

私たちは今、当たり前のように平和な生活が送れています。でも、そんな生活がしたくてもできなかった時代があった、生きたくても生きられなかった人たちがたくさんいたということを忘れてはいけません。そして、八月六日の出来事を繰り返してはいけません。

私たちが歴史とまっすぐに向き合い、伝えていくことが大切だと考えます。小さなことからでも行動を起こし、今、自分ができることをしていきたいと思います。

※「原爆の子の像」は、佐々木禎子さんをモデルに、禎子さんの同級生らによる募金運動により作られました。像の真下にある石碑には、「これはぼくらの叫びです これは私たちの祈りです 世界に平和をきずくための」と刻まれています。